

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02449

研究課題名(和文)シェイクスピア四大悲劇の翻案研究 日本の「書き換え」メカニズムの解明

研究課題名(英文)A Study of Japanese Adaptations of Shakespeare's Four Tragedies

研究代表者

芦津 かわり (ASHIZU, Kaori)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：30340425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本で生まれた、シェイクスピア四大悲劇、特に『ハムレット』の翻案に焦点を合わせ、翻案化の過程ではたらく「書き換え」のメカニズムを体系的に解明した。ある翻案が誕生する際には、多様な要因(翻案者の個人的資質や事情、日本の文化的風土や社会的圧力、日本と西洋・イギリスとの関係性、思想的風潮など)が複雑に作用し合い、せめぎ合いながらテキストを生成する。その結果、翻案作品は、原作に対して複雑な関係や態度(崇拜・模倣・横領・反発・挑戦・揶揄)を示すことになる。本研究は、個別翻案の検証を積み重ね、作品間の比較も交えることで、シェイクスピア悲劇の「日本的」な翻案化プロセスの仕組みを体系的に解き明かした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「難しい」「古臭い」と敬遠されがちなシェイクスピアと日本文学・演劇との境界線上にある作品を扱うことにより、<内向き>志向の日本人に、シェイクスピアが意外と身近なものであること、そして現在の日本文化・文学が、異文化や外国文学との絶えざる接触・融合・妥協から形成されていることを再認識させ、彼らの意識や関心を<外なるもの><異なるもの>へ向けさせることができるところに意義がある。さらに、英語論文によって、日本のシェイクスピア受容・翻案を知り得ない海外の人々にもひろく情報発信できた点にも意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：Focusing on Japanese adaptations of Shakespeare's four Great Tragedies (especially Hamlet), this study has elucidated the complex mechanisms of "rewriting" at work in the process of adaptation. In the creation of an adaptation, various factors--the adaptor's personal preferences and situations in which s/he writes, the cultural and social milieu, the ever-changing relationship between Japan and the West (England), and ideological trends at the time, etc. - interact and negotiate in complex ways to produce the text. The adapted works therefore embody complex relationships and attitudes (imitative veneration, opportunistic appropriation, rebellion, ridicule, etc.) toward the original tragedies by the world-famous author of the West. This study has comprehensively clarified the mechanism of the "Japanese" adaptation process of Shakespeare's tragedies through a series of examinations of individual works and comparisons among them.

研究分野：イギリス文学

キーワード：シェイクスピア 英文学 日本文学 伝統演劇 翻案 書き換え 受容

## 1. 研究開始当初の背景

シェイクスピア劇は数百年にわたり、世界中で多様なジャンルの無数の翻案作品(小説、劇、映画、オペラ、絵画、漫画、ゲームなど)へと書き換えられてきた。そうした翻案の研究は、国内外を問わず、今もっとも注目を集めるシェイクスピア研究の一領域である。国ごとの単位ではもちろんのこと、アジア圏、旧植民地圏、英語圏など、世界のさまざまな地域や括りでの研究が進められてきた。日本生まれの翻案についても、個別作を取り上げて原作との異同を確認したり、作品の意義や批評性を論じたりする研究や、明治以降の各翻案ジャンルごとの受容を編年史的にまとめる作業はかなり進んできた。しかし、日本の翻案特有の「書き換え」のメカニズムに着目して文化・社会的文脈のなかでよりそれを体系的に解明する研究は国内外いずれにおいても存在しない。そのような背景のもとに本研究は着手された。

研究代表者は、2012-2016年度科学研究費基盤研究(C)(24520286)「日本的『ハムレット』翻案作品の研究」において仮名垣魯文、夏目漱石、久生十蘭、宝塚歌劇団による『ハムレット』翻案を対象とした考察をすでに行っており、本研究ではそれらの成果も踏まえつつ、より広い視野から包括的に和製シェイクスピア悲劇翻案の「書き換え」の力学を検証することを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究ではとくに、日本で誕生したシェイクスピア翻案作品や翻案作家が原作に対して示す複雑な姿勢・関係性の解明を核としながら、翻案化のメカニズムを深く掘り下げることを目指した。その根拠のひとつは歴史的経緯にある。周知のとおり、江戸末期の日本は、圧倒的な軍事力と文明力を見せつけてくる西洋に対して危機感を急速に募らせる。すぐさま西洋文明を導入し、強い国家を形成しなければ、日本も植民地化されてしまう—そんな惧れを抱いて明治政府は急激な近代化=西洋化を推し進め、新国家と国民を育成しようとした。この国家プロジェクトの旗印のもとに、日本人はシェイクスピア文学と出会った。このような日本とシェイクスピアとの「馴れ初め」、つまりそもそも日本がシェイクスピアを、追いかけるべき憧れ・目標であるとともに、自らの存在を危ういものとする脅威、恐るべきライバル、敵として、二重三重のイメージで認識したことが、その後の日本的シェイクスピア受容の特徴をづけているのではないかと、これまでに行ってきた研究に基づいて推測したのである。さらに、そもそも翻案という創作行為そのものが、原作や原作者にたいする崇拜と対抗・挑戦という両義的姿勢をはらむ行為であることも念頭におき、個別の翻案作品テキストに複雑で多義的な姿勢・関係性を読み解くことを目指した。

## 3. 研究の方法

当初は四大悲劇すべてを考察の対象とする予定であったが、準備的検証の結果、対象作品を絞り込むほうがより一貫性のある、焦点の定まった考察が可能になると判断した。そこで、これまでも研究を進めてきた悲劇『ハムレット』に特化して本研究を進め、まとめ上げることとした。

具体的には、九作の同悲劇翻案作品を選定し、各々の個別分析を行なうと同時にテーマに基づく三つのグループ(近代作家たちの翻案小説・第二次世界大戦と翻案化・グローバル時代と東西文化融合)に分類しながら総括的検証を行った。その際、全体を統一する鍵概念として、夏目漱石が『吾輩は猫である』で用いた「股倉から覗く」というコンセプトを採り入れた。同小説において語り手の猫(吾輩=漱石と読み替えてよい)は、文豪シェイクスピアや名作『ハムレット』をうやうやしく眺めるだけでなく、ときに対象にむかって尻をつきだし「股倉から見て」批判する精神が重要であると主張する。本研究の論じる各翻案も、それぞれ異なる方法ではあるが、世界の「名作」に対して敬意と挑戦心を示しつつ、まさに「股倉から見」るかのように、反転させたり、視点をずらした形で書き換えて、独自の『ハムレット』の景色を描き出している。

さらに『ハムレット』の翻案以外には、夏目漱石による悲劇『オセロー』の翻案化、および劇団りゅーとぴあによる悲劇『リア王』の翻案上演を、各作品に適した分析手法を用いながら、それぞれに原作との関係性を明らかにしながら、翻案化のメカニズムを分析した。

## 4. 研究成果

### 1) 個別の翻案作品についての成果

堤春恵『仮名手本ハムレット』(1992年)についての研究。堤は、明治時代の日本人が西洋文化と出会う際に起こる混乱や困難をしばしば主題にしたが、本喜劇においても、本邦初『ハムレット』公演を目指す明治期の歌舞伎役者らが、得体のしれない西洋の芝居を前に悪戦苦闘するさま—自分たちの得意とする『仮名手本忠臣蔵』と突き合わせ、相当部分を置き換えながらなんとか理解を試みる—を描く。架空のプロットを正確な史実に埋め込む「虚実ないまぜ」のスタイル

を採る本作は、単なる荒唐無稽なフィクションの域を超えて、日本の『ハムレット』受容そのものに対して、さらに20世紀末日本に対しても鋭い批評的視線を投げかける。つまり、あまりにも確立され、当たり前で「異質性」を失ってしまった悲劇『ハムレット』のあり方や、「名作家」として君臨するシェイクスピアの中心性・絶対性を相対化しつつ、この悲劇を生まれつき理解できる、楽しめる、と錯覚する現代日本人に、日本の演劇的・文化的ルーツやこれまでの受容の紆余曲折の道のり、さらには自分たちの受容のあり方をも再考させるものなのである。鍵概念を用いて言うならば、堤作品は、日本人が『ハムレット』を「股のぞき」をしてきた模様を、さらに股倉からのぞいていると描写することができよう。

宗片邦義による『英語能ハムレット』(1989年)についての研究。宗片は、シェイクスピアの原詩に最大限の敬意を払い、それを英語のまま活かしながら、能形式に翻案化するという作業に取り組みつけた。そして、最終的には長大な原作のごく一部分を選び取り、約90行ほどの英語能へと大胆に解体・再構成した。とくに彼は『ハムレット』のもっとも有名で重要な第四独白の一行“To be or not to be, that is the question”を大胆にも反転させることで、主人公の禅的「悟り」の劇的な表現に成功している。崇拜と不遜さという相反する姿勢を内包しつつ漱石の「股のぞき」の提案を実践し、能や禅といった異文化の視点から『ハムレット』の新たな景色・解釈を示した点で、本作は日本的「書き換え」の注目すべき例となっていることを明らかにした。

小林秀雄の短編「おふえりや遺文」(1931年)に関する研究。本短編は、ヒロイン・おふえりやが自殺前夜に恋人に遺書をしたためるという体裁で書かれた、一人称語りの『ハムレット』再話である。つまり、主人公ハムレット以外の視点から語りなおすという手法で原作の「股のぞき」を行っている。本研究ではとくに小林のヒロイン・おふえりやが、「書く」という行為や言語そのものに強いこだわりを示す点に着目し、それを小林の言語観と関連づけて論じた。小林は原作世界における言語のあり方—とくに男女間の不公平や矛盾だらけの言語規範—に対する批判や、ハムレットの言語的な気取り、さらにそれに基づくハムレット崇拜の伝統に対する皮肉や諷刺を本作で表現しているのである。従来の「おふえりや遺文」批評においては、『ハムレット』は小林の自己告白のための道具立てにすぎないと考えられてきたが、実のところ小林は、この悲劇を批評対象としてじっくり見据え、言語のあり方という点から同悲劇の創作的批評を繰り出している結論づけた。

夏目漱石の小説『行人』(1912-13年)に関する研究。漱石は、同小説執筆において、シェイクスピア悲劇『オセロー』を、まさに「股のぞき」しながらに独自の角度から観察する。漱石が悪役の問題や怪物の比喻、他者性といった主題において、『オセロー』の提供する素材にかなりの変奏と断片化を加えつつ『行人』に描き出した点を明らかにした。

劇団りゅーとびあ『リア王・影法師』(2004年)に関する成果。本公演の演出家・栗田芳宏は、シェイクスピアの『リア王』を日本の伝統芸能である能の様式(とくに「夢幻能」と融合させる形で翻案化し、二つの「正統」の融合を図る。能舞台での上演という特殊な状況下における書き換えのあり方を、言語、演技、衣装や小道具、音楽など各方面から丁寧に分析する共同研究を進めてきた。近く国際プロジェクトとしてオンラインで出版する予定である。

## 2) 総括的研究としての成果

これまでの個別研究の総決算として単著『股倉からみる『ハムレット』—シェイクスピアと日本人』(329頁)を刊行した。夏目漱石『吾輩は猫である』から「股倉ごしにシェイクスピアやハムレットを見る」という言葉(概念)を借用し、それを全篇に通底する基本的テーマとして用いながら、日本におけるシェイクスピア翻案の具体的な事例を検証するとともに、本課題を通して調査をすすめてきた外国の受容に関する情報や、総括的議論もあわせて纏めあげることができた。

さらに英国のジャーナル Critical Survey 特別号に、本研究課題の主要部分を紹介する内容の英語論文を“Hamlet through your legs’: Radical Rewritings of Shakespeare’s Tragedy in Japan”, Critical Survey, 33.1 (2020)として発表した。また日本文化研究書大衆文化研究プロジェクトからの寄稿依頼を受けて、「ヤマトハムレット七変化」という題の小論を完成させた。すでに受理され、編集作業や図版等の許諾申請作業に移っていると聞いている。この論考も本研究課題の内容を大いに反映するもので、黒澤明の映画や森下裕美の漫画に対する新たな知見を過去の研究成果に加えつつ、〈キャラクター〉という観点からシェイクスピア悲劇の日本的受容を紹介した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Ashizu Kaori  | 4. 巻<br>33            |
| 2. 論文標題<br>'Hamlet through your legs'   | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>Critical Survey   | 6. 最初と最後の頁<br>85, 102 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.3167/cs.2021.330107                              | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>該当する          |
| 1. 著者名<br>Kaori Ashizu  | 4. 巻<br>56            |
| 2. 論文標題<br>Zen Hamlet--Kuniyoshi Munakata's Adaptation of Shakespeare's Tragedy | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>Shakespeare Studies (The Shakespeare Society of Japan)                | 6. 最初と最後の頁<br>1,17    |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>芦津かおり   | 4. 巻<br>64            |
| 2. 論文標題<br>小林秀雄「おふえりや遺文」における言葉と『ハムレット』批評  | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>Albion  | 6. 最初と最後の頁<br>29,43   |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>芦津かおり   | 4. 巻<br>43            |
| 2. 論文標題<br>「漱石『ハムレット』受容 『吾輩は猫である』の「溺死」を手がかりに」                                   | 5. 発行年<br>2016年       |
| 3. 雑誌名<br>神戸大学文学部紀要   | 6. 最初と最後の頁<br>17, 33  |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 1件）

|                           |
|---------------------------|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり          |
| 2. 発表標題<br>和製『ハムレット』翻案の研究 |
| 3. 学会等名<br>関西シェイクスピア研究会   |
| 4. 発表年<br>2018年           |

|                          |
|--------------------------|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり         |
| 2. 発表標題<br>股倉から見る『ハムレット』 |
| 3. 学会等名<br>日本比較文学会（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2018年          |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                                |
| 2. 発表標題<br>アダプテーションの内と外ー日本の『ハムレット』翻案における「内」と「外」 |
| 3. 学会等名<br>日本英文学会関西支部（招待講演）                     |
| 4. 発表年<br>2017年                                 |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                            |
| 2. 発表標題<br>No(h) Hamlet? 宗片邦義の英語能Hamletについて |
| 3. 学会等名<br>日本シェイクスピア協会                      |
| 4. 発表年<br>2016年                             |

|                                    |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                   |
| 2. 発表標題<br>シェイクスピアと漱石-『ハムレット』を中心に  |
| 3. 学会等名<br>神戸大学第11回ホームカミングデイ(招待講演) |
| 4. 発表年<br>2016年                    |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                                  |
| 2. 発表標題<br>日本における『ハムレット』の受容をめぐる 夏目漱石『吾輩は猫である』を中心に |
| 3. 学会等名<br>神戸英米学会(招待講演)                           |
| 4. 発表年<br>2017年                                   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                                     |
| 2. 発表標題<br>「越境するシェイクスピア」                             |
| 3. 学会等名<br>第6回神戸大学・北京外国語大学国際共同研究拠点シンポジウム(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年                                      |

|                                   |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり                  |
| 2. 発表標題<br>漱石の股倉のぞき-『オセロー』から『行人』へ |
| 3. 学会等名<br>日本比較文学会(招待講演)          |
| 4. 発表年<br>2021年                   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>芦津かおり  |
| 2. 発表標題<br>日本における悲劇『ハムレット』受容 “To be, or not to be” 独白をめぐる |
| 3. 学会等名<br>懐徳堂秋季講座（招待講演）                                  |
| 4. 発表年<br>2019年   |

〔図書〕 計3件

|                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>芦津 かおり       | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>京都大学学術出版会    | 5. 総ページ数<br>342 |
| 3. 書名<br>股倉からみる『ハムレット』 |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>芦津かおり                  | 4. 発行年<br>2016年 |
| 2. 出版社<br>研究社                    | 5. 総ページ数<br>292 |
| 3. 書名<br>『甦るシェイクスピア 没後四〇〇周年記念論集』 |                 |

|                                   |                 |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>荒木浩他                    | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>KADOKAWA                | 5. 総ページ数<br>370 |
| 3. 書名<br>『<キャラクター>の大衆文化 伝承・芸能・世界』 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  |                           |                       |    |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|